

甲奴郷土史だより

第18号
2021年1月

甲奴郷土史研究会発行

郷土誌「げいびグラフ」から《ああ、懐かしの甲奴・・・》其の二

(株)菁文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料で、掲載させていただく了承を受けた記事をご紹介します。今回も甲奴町名誉町民の近藤薫明さんや、懐かしいイベント・街並みなどをご紹介します。



【ふるさと賛歌《甲奴町の巻》私を鍛えたふるさと】

当時城北名誉学園長・城北埼玉理事長 (在埼玉) 近藤 薫明 (甲奴町名誉町民)

昭和五十八(一九八三)年第三十二号 (株)菁文社「げいびグラフ」より

ふるさと賛歌

《甲奴町の巻》

私を鍛えたふるさと

城北名誉学園長・城北埼玉理事長 (在埼玉)
近藤 薫明
(甲奴町名誉町民)

夢に見るふるさと

先日突然電話で、三次の菁文社編集部から、ふるさとの讃歌としてふるさとの思い出を書けとの事であった。近頃年のせいカペンを執ることが誠に疎ましくなった。しかしまた一面、これも年のせいか最近夢枕に、少年時代のふるさとの事が現れることが多い。兔追いしあの山、小鮒とりこの川……から両親のこと、竹馬の友のことなど懐かしいことが限らない。昔の夢を追うて、折角のリクエストに応ずることにした。

人間は61歳をもって還暦の年といい、生まれた年の干支に還るのである。本家(本卦)がえりといって、赤頭巾などを冠ってお祝いをする習わしがある。近頃日本人の寿命が延びてきたことから考えても、60歳はむしろ人



筆者 近影



須佐神社の社を抱いた小童の集落は山里らしい静かなたたずまいをみせている。左手前が筆者の生家

ら原因不明の病魔におそれ、極度の貧血症状が頻発した。無医村のため療養専念もならず、折樽や漢方医、富山の売薬に依存し、高等小学に進学して静養に力めた。

6月頃病も小康を得たので中学進学希望を強く、父に連れられ日影館中学校長宮沢順定先生を訪ね、途中編入の請願が認められて念願を達成することになった。その節、威厳と温容とを兼ね備えた宮沢先生の人柄は、少年の私に強く印象づけられ、これが機縁ともななって私が生涯を中等教育に身を投じ、私学経営をすることにもなった所以なのである。

先生は、距離は少し遠いが運動にもなるから、友人を求めて当分通学して見たらという事であった。帰宅後早速近隣の高級生2人を勧誘して、3人打ち揃って編入を許された。以来3人相携え相助けて中学5年間を通学した。内1人は共に日影館を卒業して小学校に勤務したが、意外に早く天逝した。他の1人は3年生で挫折して、都会に出て健康を損ね間もなく他界した。因みに、広定村から日影館に進んだものは、5、6年先輩に神主の子息と小学校長の子息の2人であったが、われわれ3名はそれに続くもので、草分けに近いといつてよからう。

さて吉舎までの行程は、最短距離が片道5km、2時間か2時間半を要した。夏冬を通じ朝5時起床、6時には3人打ち揃って拙宅の裏山の峠を越えて宇賀へ出て、更に吉舎の峠を越え、雨の日には山道がすべて谷川に変わる。雪の日には吉舎の峠は吹きさらしで、これを突破するのに一苦労した。

服装は小倉の袴に袴の下駄履で、教科書・弁当は風呂



日影館への通学は、宇賀へ出て宇賀峠を通って吉舎へのコースをとる。今でも小童の人は吉舎への用足しにこの道が選ばれている。右の写真は小童から宇賀へ通じる山道、上の写真は宇賀の三産路で、蕎麦作りにいそむ宇賀の住人。

敷に包んで首に巻きつけ、途中歩きながらの読書は大切な勉強時間でもあった。登校時、少しの弛みや一寸した事故にあっても学校を遅刻する。下校には、裏山の山に狐が出るという噂におびえ、日のあるうちに帰宅を急ぐ。今から考えると随分の難業であったが、当時はこの道を突破しなければ日影館卒業の目標が達成できないのであるから、別段不平も不満もなく続けたのであった。

冬季は寒風に立ちどまったり、手足や耳の霜焼けなどで悩んだこともあったが、これは寒さのためであって誰を恨むこともできない。年を追うごとに各方面から通学の友人も増えて結構楽しかった。

私を鍛えたふるさと

このように心のおだかまりを捨て、姿勢を正して矯養と歩くことを、今流行の健康法としての正常歩である。或はジョギング、徒歩会、ワンダーフォーゲルである。これを毎日実行したのであるから、私の健康は知らぬうちに回復した。私のレントゲン写真には、左肺の一角に大きく陰影が出るし、胃には黒い汚点がある。医師は固まっているから心配ないと言いが、私には未だかつて自覚症状がない。小学5、6年頃の原因不明の病は、これだったのかと回想している。

中学3年の時、日影館に制服・制帽の規定がもうけられた。これは生徒からの強い要望によって決定されたのであった。しかし、重い軍靴で通学する苦しみは堪えられないもので、遂に靴を背負って通学し、学校で履き替える有様であった。

その頃、村に初めて自転車が入った。その第1号として購入し自転車通学を開始した。しかし道路は凸凹で水溜りや泥ぬかるみが多く、一旦これにはまればハンドルをとられる。急坂が多くて自力では登れず、または自転車を担いで登る有様だし、たまに道路が補修されれば碎石ばかりで、1日一度はタイヤのパンクを覚悟しなければならぬ。全行程の三分の一は徒歩で補わねばならぬ



生の折り返し点であって、それから自分の成長の道を通って、原点は120歳から125歳になって完全な赤ん坊に還ることにあるのではなからうか。人生60歳は耳順の年ともいって、この頃から経験を重ねる年齢となり、年とともに自分の思いも壮年時代・青年時代・幼少年時代へと遷るような気がする。

最近見た夢は、小学校に上る前後の頃、奥山の農業用貯水池に禁制を冒して水泳に出かけ、泥沼に足をとられ「アッ危ない」と云って目をさましたことだ。お宮の樞の木に巻きついた藤の蔓をブランコ代りにし、着物を引き裂いて母親に叱られたり、裏の禿山の一角に滑り台を作り終日楽しく遊び、帰宅後着衣に血痕のついている事を注意され、お尻に裂傷のあることを発見して急に痛みを感じたことなど、ふるさとの大自然の楽しさ、面白さ懐かしさは、雷・風水害などの怖さとともに、心の奥底に深く滲透している

しかして我がふるさと一円は、中国山脈の脊梁地で、瀬戸内海と日本海の水蒸気線に当たる山間の僻地である。その中で小童の祇園(須佐神社)は、額及び戸手の祇園と並んで備後の三祇園といわれ、近郷の信仰を集めている。須佐神社は、素戔嗚尊が天の岩戸事件の罰を受けて高天原を追放され、出雲に降る途中この地に居を構え、矢野温泉に通うなど暫く療養された旧跡と伝えられている。しかし地区一帯は文明開化に接することが遅れ、所謂過疎地帯であった。

私が小学2年生の頃、祖父に連れられて讃岐の金毘羅参りをしたことがある。徒歩で尾道まで、途中木の山の

旅人宿に一泊、尾道の海浜宿に一泊し、帰りに同じ行程を経た。汽車・汽船及び海を見たのはこれが最初で、悉く珍しいものばかり、特に海面に轟き渡るような汽船の号音は、深い印象として永く記憶に残った程、世間から隔絶した僻地であった。

因みに、小学1年の頃私の村に初めて電燈がついた。日課としていたランプ掃除の煩わしさを解放されたのみならず、煌々と廻りを照らす、これが文明開化の恵みに接した第一歩だったであろう。

ふるさとでの少年時代

小学校は1学年20名内外、2学年複式授業で全校60~70名の小規模であった。義務教育が4年から6年に延長され、最初の5年生として甲奴村本郷小学校に臨時入学した。初めて野球が伝えられたのもその時であった。

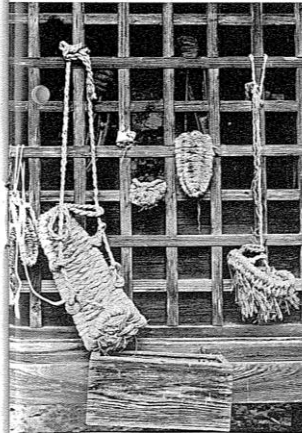
ルールを習って愈々開始したが、たまたまAの振ったバットがBの口元に当たって、前歯を2本折って大騒ぎとなり、以後校長の命令で野球は厳禁された。その後私は野球をする機会がなく、今に至るも見る野球にとどまっている。

その後小童小学校が竣工したので、私はふるさとの学校に帰りこれを卒業した。ところが小学校5、6年頃か



一須佐神社は「小童の祇園さん」と呼ばれて親しまれている。

須佐神社参道入り口。昔ながらに門前町の雰囲気が漂っている。



足の病を直すといわれる客人神社には、大小さまざまな草鞋が奉納されていた。



である。これは日本が年間を通じて四季の変化が明らかに分かれていて、桜や富士山等に象徴される優しくて永遠に変わらぬ慈母のような人情のこまやかさと、また厳父のようなきびしい自然環境の中に培われたユニークな民族性を形成していることによるものである。

最近の科学文明の発達が目ざましく、原子力産業・遺伝子工学・コンピューターの普及・エレクトロニクスの活用等、これは人間が自然現象に対し緻密な観察研究を重ね、それによって自然の理法を究め、その理法によって自然の宝庫を開いたものである。この人間のたくましい創造力に驚嘆すると同時に、自然のもつ汲りども尽きない宝庫神秘性には、謙虚な憧憬を感じないわけにはゆかない。謙虚を失った創造は傲慢に通じ、万事必ず失敗に終る。この創造と謙虚は人間のもつ心の仕組みであって、人間が生まれてから育った自然環境の中から無心の間に受け、心の奥深く沈潜しているものだと思っている。東京をはじめ大都市の中には、自然環境即ちふるさとのない子供も少なくないので、東京では出来るだけ自然環境を加味した地区を作り、そこに小中学生を収容して、一日ふるさとを味あわせようとする試みさえある。

わがふるさは純粋な自然環境を広く保持している。健全なる子弟育成のためにも、心ゆくまで活用させたいものと切望している。

→昔の日影館中学校は、現在県立高校として近代的な校舎になっている。



かった。それでも行程の30分位は短縮できた。しかし自転車通学に遡入ってから、これに費やした時間と費用や恨み悩みは募るばかりであった。かといって以前の徒歩通学にはかえれず、5年生の後半は吉舎に下宿した。

十数年前に私は昔を偲んで自動車で、かつて通学したこの道を通ってみたが、平坦に舗装された道路を昔の急坂の感じもなく、ノンストップ20分足らずの快適なドライブで小童に着いた。一挙にして昔の苦勞話は笑話に転じたのであった。

私は上京後も可能な限り市内で歩くことを実践した。日影館時代は1日5万歩を実践したのであるが、東京府立第四中学校（現東京都立戸山高校）に就職してから居所も定着したので、19年間片道30分の行程即ち往復1万歩を歩き続けたので、健康も一段と自信をつけた。

歩くことはすべての運動を超えた最高の健康法であることは云までもない。現在私の小学校時代の同級生は一人もいない。日影館同級生の東京在住者も皆無である（地方には2、3名あると聞いている）。学問のふるさと国学院大の同級生も今は一人もいない。私が今日まで健康であり得るのも、これ備えにふるさとの自然環境によって培われたものと、感謝している次第である。

ふるさと日本の時代

今や物質文明は高度の成長を遂げ、あらゆる面において都会人・地方人の区別はない。一億総中産階級の意識のもとに、衣食住の生活様式は少しも変わるところはない。しかし反面、誕生した当時の自然環境は極度に変更されたり破壊されたり、職業のため転住を余儀なくされて、遂にふるさとを見失った人は少なくない。総じてふるさと観念は稀薄になろうとしている。

だが最近、日本人の海外進出は目ざましく、旅行者を含めて年間600万人内外にも達し、年々増加の傾向をたどっている。これ等の人々は、われ等のふるさは日本であるという意識が強く、誇りと責務を覚えていること

→筆者が通った小童小学校は、現在地より半キロ東の山の中にあつて、今は殆ど変わって跡形もない。



甲奴町名誉町民であつた小童出身の近藤 薫明さんは、小童小学校、日影館中学校、国学院大学を卒業後、埼玉県にある城北中学校・高等学校の校長を経て、一九八〇年十一月に学校法人城北埼玉学園として独立、理事長に就任されました。

この原稿に、『これも年のせい最近夢枕に、少年時代のふるさとの事が現れることが多い。』と書かれています。その当時の事を細かく覚えておられ、当時の色々な出来事などを書かかれており、近藤さんが遠く埼玉から『ふるさと甲奴』をずっと想ってこられたことがわかります。

『ふるさととは遠きにありて思ふもの』

これは室生犀星の有名な詩、『小景異情（その二）』です。まさにそのとおりだなあと思いました。



次は、今は懐かしい、甲奴最大のイベントだった『こうぬ・松茸レストラン』を紹介した記事です。その当時は特別列車を設けるほど、大勢の人々がこのイベントへ訪れました。次第に「甲奴町産松茸」が準備できなくなり、程なく『こうぬ・松茸レストラン』は終了。その後、カーター・ピーナッツ収穫祭へとお祝いする、『カーター・松茸レストラン』で行われたという、面白いイベントについての記事です。

『こうぬ・松茸レストラン』で行われたという、面白いイベントについての記事です。なかなかの奇祭・・・です。

とう ず もう
復活 当相撲 —こうぬ・松茸レストラン—



みんなでイメージを出しあって再現した当相撲。



↑両手は使わず、ジャンプしながら激しく突く。

→家族そろって秋の味覚に舌つづみ。レストラン会場は大盛況。



秋晴れの好天に恵まれた10月18・19日の2日間、甲奴町弘法山憩いの森で、第3回 ふるさと こうぬ 松茸レストランが開かれ、岡山から臨時列車も運転されるなど、会場は4000人を超える入場者で終日賑わった。

松茸レストランは甲奴町商工会の主催で、松茸めし、焼き松茸、すき焼きなど松茸料理が存分に味わえるレストラン会場を中心に、松茸やふるさとと産品の即売コーナー、松茸やなばが当たる宝さがし、釣り大会などが開かれ、特設ステージでは歌謡ショーや伝統芸能も披露された。中でもステージの目玉となったのは、今年初めて復活再現した当相撲なるもの。

この当相撲、本郷大宮八幡宮に伝わる奇祭を、160年前に書かれた甲奴 国郡志だけを頼りに、みんなでイメージを出しあい、現代版当相撲に仕立てたもの。1mもあるようなワラ

で作った男根を股間にはさみ、赤いふんどしでくくりつけた力士が登場すると、会場は一瞬どよめき、仕切が始まると爆笑の渦につつまれた。勝負は激しい突き合いで、土俵（ステージ）下に落ちるひと幕も。取り直しの末、東方米の山の男根尽き果て、西方麦の山に軍配があがった。

会場周辺はマツタケ山らしく立入禁止のロープが張られていたが、今年是不作の年で松茸集めにも苦労したとか。しかし、大自然の中での松茸入りすき焼きパーティーなど格別で、参加者は深まりゆく秋の1日をたんのうしていた。

【復活 当相撲 —こうぬ・松茸レストラン—】
 昭和六十一（一九八六）年第四十五号 俳書文社「げいびグラフ」より



*現在の高橋の様子 出典：Googleearth



本郷の町の様子は大正時代、梶田の高橋（たかはし）は昭和七年頃の写真です。

大正時代の本郷は、菓屋根の家や畑が広がり、家も今より少ないですね。

梶田に架かる高橋は、昭和初期コンクリートで出来た橋で、大工事だったようです。その当時の苦労が偲ばれますね。

写真を見て、懐かしい・・・と思われる方も多いのでは。

甲奴郡

甲奴町

(写真提供・池田一弘氏)

▶上下川に架かる高橋（昭和7年）当時としては大工事だったコンクリート橋脚の高橋完成記念写真。三次方面を望む。現在は左山側をJ只福塩線が走る。

甲奴町本郷遠景（大正末期）写真中央、白く見える小道は現在の駅前商店街。道は川にぶつかり左に行く（右）右に行く（左）山側の白っぽい建物は、佐佐木善三が建てた遊園地。

26

【特集】写真で見る 街並み今昔
昭和六十三（一九八八）年第五十号 株書文社「げいびグラフ」より

耕地整理の記念碑

(甲奴郡甲奴町本郷)

碑銘抄

近年は各市町村とも農業構造改善事業などで圃場整備が盛んに行われている。広島県で最初に耕地整理が行われたのは、明治37年(1904)甲奴郡甲奴村本郷・西野・梶田地区であった。この事業を発起したのは、当時の甲奴村長渡辺就三で、永井頼雄、田辺六一郎が協力者として尽力した。

1期工事は、明治37年2月から本郷地区の13町5反で

始められたが、当初は地区民の同意が得られず、渡辺村長ら指導者が苦心した。「広島県農業発達史」の記録によると「頑迷の徒は不成立を神明に祈り、無謀の徒は弁護士と研究し打破せんことを企てた。一方、十幾町歩の土壤を攪転し、日々幾百人の工夫雑踏を極める際、四圍の反対の矢をうけ、日夜調停に奔走する村長の苦心は察するに余りあり」であったが、同年6月その困難を克服して1期工事を完成した。

当時の工事は機械もなく、すべて人力で行われていた。村長が発起したこともあり、近隣の村へ応援を頼むなど1日に数百人の工夫を集め、人海戦術で工事は進められた。今日のように休耕することもできず、田植えの時期に間にあわせなければならなかったため、猛反対の中、何としても完遂させる必要に迫られていたのである。

2期工事は翌年の2月に西野・梶田地区の40町歩を着工、1期工事が評価されたのか、以前ほどの反対はなく、区民の協力で進捗した。渡辺村長は「毎朝5時に自宅を出て、各田区の工事の監督指揮にあたり、翌日の施業の計画を指示し、夜におよんで役場に出動し公務を行い、夜半帰宅する。この如く4ヶ月におよび倦怠の色なし……時あたかも厳寒の候で、日々水田に踏入り足指に凍傷を起し、全趾ごとごとく脱したり」の健闘ぶりであった。

指導者の献身的活動と区民の協力により、明治38年6月、1期・2期工事53町6反1畝3歩、整理前の田区数2540枚が整理後475枚になった。総工費1万5300円の耕地整理事業が完成した。これにより労力節減、米の増収などの成果があり、農業経営向上に貢献した。

明治42年、広島県の農事功労表彰をうけ、記念にこの碑が建てられた。(池埜繁治)



この碑は、郷土・甲奴村の発展に尽くした渡辺就三村長と、甲奴村本郷出身の永井頼雄衆議院議員の偉業を後世に伝えるため作製されました。現在甲奴中学校校庭にあり、記事ではお二人の偉業を詳しく記述してあります。

甲奴町誌にも、左記のような文章が載せられています。

『……現在の圃場整備事業は機械力による通年施工で行われるが、当時は、秋に稲の収穫を終えてから着工し、翌年の田植えまでの数か月間に完成しなくてはならなかった。まして工事はすべて鋤・つるはし・もっこ・台車などの人力によるものであったから、その困難さは現在とは比較にならない。……』



*1970年代の本郷の様子

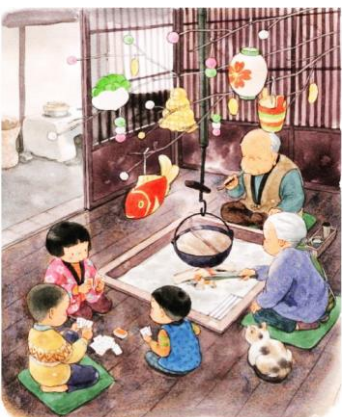
出典：国土地理院



郷土の年中行事と方言 く色々な『正月』く

冊子『郷土の年中行事と方言』より、今回は色々な「正月」を取り上げてみます。「正月」と言っても、これだけの行事があったようです。

- * 一月一日 元日
- * 一月十五日 小正月・粉正月
- * 一月二十日 廿日正月・麦飯正月
- * 一月三十一日 送り正月
- * 二月一日 一日正月（ヒテーショীগツ）
- * 二月二日 ヤイトー正月
- * 二月中旬 旧正月



一月二十日の「麦飯正月」。この日の夕食は麦飯を炊いて食べる慣わしがあり、食後麦田に出て「麦飯食うて腹太やのう」と叫ぶとその年の麦は豊作になると古老の話があるそうです。「七草がゆ」「粉正月」「麦飯正月」と正月の日々の食事も日ごとに変化して、次第に日常の粗食に戻るようになっていきました。美味しい濃厚なご馳走を食べることの多い正月には、七草がゆのような軽食で、胃腸を調整するというのは現代の感覚であって、昔はそんな生やさしいものではなく、飯料をいかに食い延ばすかが、普通の農家にとっては重要なやりくりだったそうです。

麦作は食糧難の戦時中はもちろんのこと、昭和三十年代まで盛んに行われ、子ども達も学校から帰るなり麦刈りの手伝いに精を出しました。小麦や裸麦も作りましたが、ほとんどが大麦で、これを精白し米に混ぜて主食にしました。また麦糠は牛や鶏の飼料になり、麦藁は駄屋の敷藁になりました。



足王さん・手王さん（足王神社・手王神社）

甲奴郷土誌だより第17号に載せた、足の健康をお祈りする足王さんと手王さんですが、昨年の十一月二十日に行われた「けんこうウォーキング」で栗島神社を訪れたのですが、平成二十一年に栗島神社へ遷座されていたことがわかりました。現在は新しい祠に仲良く鎮座され、お詣りされる方の足と手の健康を見守って下さっています。

ウォーキングの参加者の方々は足王さん・手王さんに手を合わせ、永岡神職さんが押んでくださった「御神米」をいただいで帰られました。

また、ちよつと座って休憩できる「お休み処」があるので、ウォーキングや散歩の際にちよつと足を伸ばしてみてくださいいかがでしょうか。



こうぬ 思い出アルバム



*本郷 平田自転車屋さん前



*西野 JA庄原 甲奴支店前



この写真は、福田にお住いの方からお借りした写真です。本郷にあった平田自転車屋さん前の写真と、西野のJA庄原 甲奴支店前などの様子です。店先にこれだけのバイクが集まると圧巻ですね。ご自慢のバイクをご披露といったところでしようか。

昭和二十年頃だそうですが、昔はこんなに賑やかだったんですね。

事務局より

- ・会員募集中です。ご紹介ください。
- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構です。お聞かせください。
- ・「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
- ・古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ掲載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

〇八四七―六七―三五三五

